



親が助かれば 子も助かる

虐待体験 封印解き自叙伝

子どものころ親から虐待を受けて育った女性が、その壮絶な半生を振り返った自叙伝を出した。記憶の封印を解き、人前で体験を語れるようになったのは、虐待のない世の中を願いつつ早世した兄の思いを引き継ぎたいと思ったからだ。

「父に頭を水に沈められ、もう死ぬと思った時、『お父ちゃん、もうこれで虐待せんで済む』と思いました。10月末、大阪府島本町の公民館 細身のパンツスーツ姿で登壇した島田妙子さん(39)が、普段の元気がいっばいの姿からは想像もつかない話を始めた。

大阪で映像制作会社を営む島田さんは神戸市出身。4歳で両親が離婚し、兄2人と児童養護施設へ送られた。7歳の頃、父が継母を迎えに来た。虐待の始まりだった。当時22歳の継母は、夜中に正座を強要して眠らせなかったり、担任教師に「娘は虚言癖がある」と吹き込んだりした。継母の手前か、優しいかった父も次第に殴る蹴るの暴力を加えるようになった。

取り締まりじゃない、声をかけて

包丁を手にした父に追いかけられ、裸で外に逃げた。頭を湯船に沈められた。「誰かに言えはお父ちゃん逮捕されちゃう」。逃げ場はなく、「大きくなったら早く家を出よう」と次兄の浩二郎さんと慰め合った。中学1年で父に首を絞められたとき、「ここでは生きていけない」と家を出た。教師に保護され、再び児童養護施設へ。

* * *

父は謝罪して自殺、継母は孤独死

中学卒業後、工場勤めなど様々な仕事を経験した。持ち前のハングリーな道を切り開き、19歳で撮影やアルバム作りの会社に。小学校や幼稚園で子どもの成長を記録する仕事に、やりがいを感じる。自宅には自分の子どもの頃の写真は1枚もない。結婚して3児に恵まれ、「昔のことは思い出すこともなかった。だが昨年末、心の支えだった次兄が白血病で闘病の末、40歳で亡くなったことが転機になった。親から受けた虐待をブログにつづ

り、「困っている子どもに手を差し伸べてあげて」と訴えていたことを、後から知った。「あたしは元気なんだから、何かせなあかん」。今年、自叙伝「le love smile」2巻を相次いで出版。教育委員会や児童養護施設から講演に招かれるようになった。

う。「大人の心が助かれば、子どもは助かる」。気になるのは、「虐待を疑ったらとにかく通報を」という言葉が独り歩きすることだ。児童虐待防止のオレンジリボンが「悪い親を取り締まる象徴」ではなく、しんどさを抱える親に「気軽に声をかけて」というサインであってほしいと願う。

自らもアスペルガー症候群の長男誠也君(12)の育児をしんどいと思った時期がある。毎日のようにパニックを起こして泣きわめき、暴れていたころだ。「どんなしつけをしてるの?」「虐待?」。周囲のそんな視線が突き刺さる。

「親の気持ちを受け止めてくれる場が必要」と痛感した。夫婦関係、貧困、ストレス。虐待の背景には大人の心をむしばむ問題がある、と思

講演を終え長男誠也くんと話す島田妙子さん。初めて講演を聴いた誠也君は「ますます母ちゃんのこと好きになっちゃった」
大阪府島本町、伊藤菜々子撮影

2011年(平成23年)
11月10日
木曜日



経済8・11面
国際12・13面
金融情報16・17面
教育23面
スポーツ24・25面
囲碁・将棋29面
科学31面/小説31面
生活33面/地域34・35面
TV・ラジオ27・29・40面

朝日新聞大阪本社
発行所:〒530-8211大阪市北区中之島3-2-4
電話:06-6231-0131 www.asahi.com